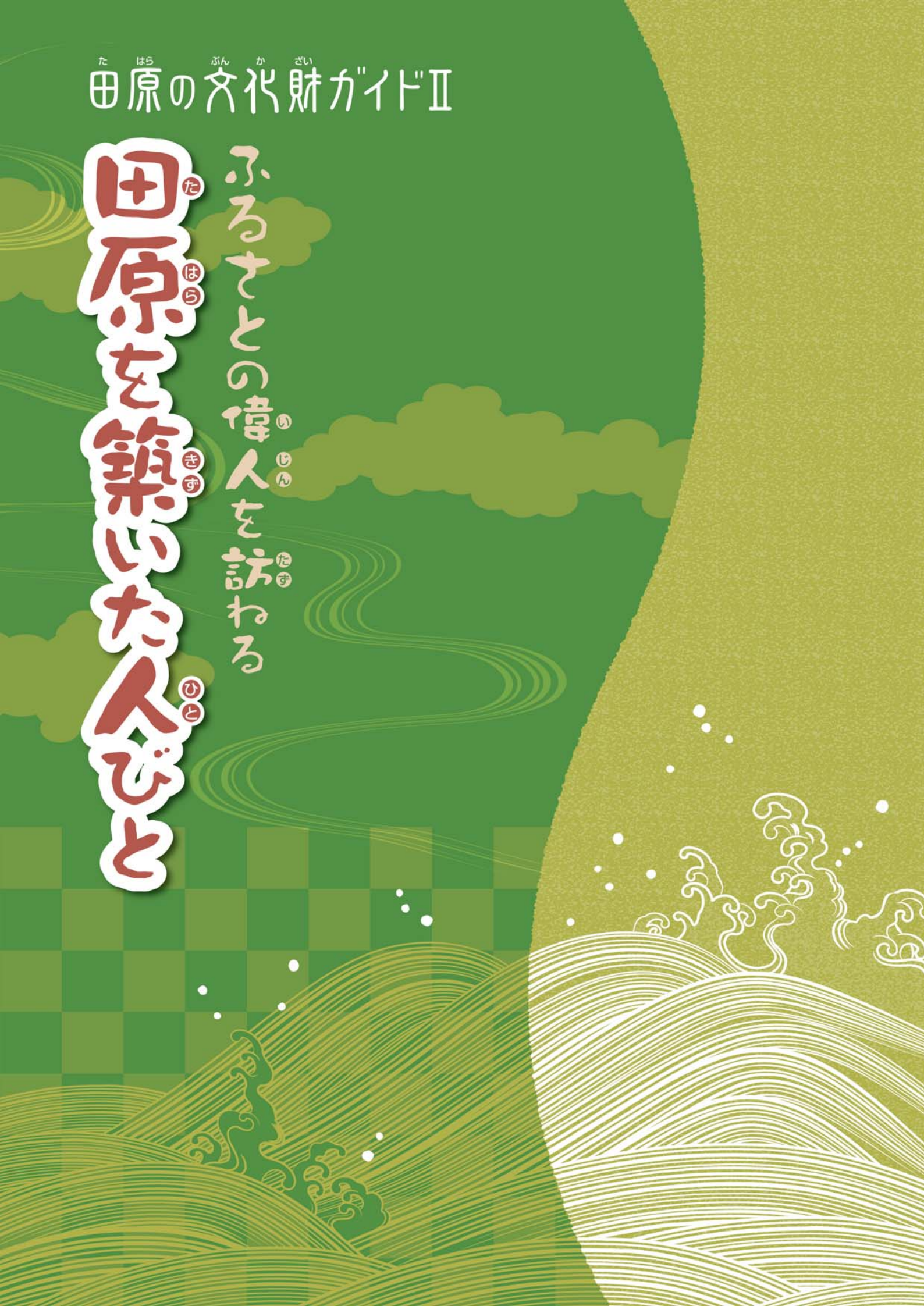


た はら ぶん か ざい  
田原の文化財ガイドⅡ

田原を築いた人びと

ふるさと  
の偉人を  
訪ねる





田原の文化財ガイドⅡ

ふるさとの偉人を訪ねる  
田原を築いた人びと

◆凡例

- 本書は、田原市教育振興基本計画にもとづき、市民のふるさと学習の一助となるように編集されたものです。
- 本書に掲載した人物は、田原市出身、もしくはくらしの方で、ふるさとの政治、経済、産業、教育、文化などの発展につくした故人で、おおむね昭和40年代までに活躍した人を掲載しました。
- 本書はあくまでも概要を示すもので、また、今回紹介された人以外に、学ぶべき多くの人が存在しています。今後はこれらの人たちの掘り起こしも必要です。
- 本書は以下の構成となっています。

- 本文編 主な人物の解説
- 資料編 1 人物一覧(略歴や参考文献、ゆかりの地) 本文編掲載の人はのぞく。
- 資料編 2 ゆかりの地を訪ねる
- 資料編 3 参考図書

- 本書で紹介した人たちは、すでに多くの書籍で紹介されたものを中心にまとめたものです。本書に掲載、未掲載の先人たちそれぞれの人物の業績の優劣をつけることを目的としていません。
- 本文編で紹介した人物は、資料編には紹介していません。
- 参考図書は、販売されているもの、図書館で閲覧できるものを中心に掲載し、研究論文等手に入りにくいものは紹介していません。詳しくは下記にお尋ね下さい。

【問い合わせ先】  
 田原市教育委員会 文化生涯学習課 ☎0531-23-3635  
 田原市博物館 ☎0531-22-1720

◆三河湾を支配した  
戦国戸田氏

【せんごくとだし / 在城期間 1480-1547】



◆初代 宗光 [1439~1499] 宗光は、上野(現在の豊田市)から老津に移ったのち、田原城を築き、ここを拠点に渥美半島をはじめ、三河湾を制し知多半島南半分も支配しました。その後息子憲光に田原城を譲り、二連木城(豊橋市仁連木町)に移った後、静岡の今川方の船形山城(豊橋市雲谷町)を攻め落としましたが、今川方の朝比奈軍に攻められ討ち死にしました。

◆2代 憲光 [?~1513] 憲光は今川氏を味方に牧野氏の今橋城(豊橋市吉田城)を攻め落とし、渥美半島から知多半島の南半分、東は遠州境にまで勢力を伸ばしました。憲光の時代は戸田氏の絶頂期でした。その後、田原城は政光に譲り、憲光は知多半島の河和城に移り「河和殿」と呼ばれました。

◆3代 政光 [?~1548] 今川氏は、戸田氏の今橋城、続けて田原城を攻めました。政光は今川との和議をむすび今橋城を開けました。田原城を子宗光に譲った後は、仁崎村に隠居し「仁崎殿」と呼ばれました。

◆4代 宗光 [?~1547] 西三河の松平清康(徳川家康の祖父)は勢力が強くなり、田原城にも攻めてきました。また勢力を強めてきた駿府(静岡県中東部)の今川義元に対抗するため、二男宣光を二連木城に入れ、子憲光に田原城を譲り隠居しました。

◆5代 堯光 [?~1547] 今川・松平氏連合軍と尾張の織田氏との争いの時代、松平広忠は今川義元との同盟のために、6歳の子、竹千代(のちの徳川家康)を人質に送ることになり、後妻の於牧の実家である田原の戸田氏にその役を頼みました。しかし、堯光はそのまま竹千代を織田方へ渡しました。今川義元は大いに怒り、天文16年(1547)田原城を攻め、宗光、堯光親子ともに討ち死にしました。

この人質事件は江戸時代から語り継がれています



が、戸田氏が滅ぼされたのはほんとうだとしても、違うようです。

戸田氏は初代宗光が築城から5代約70年間、田原を本拠として海を越えて知多半島の半分までも支配しました。戸田氏が三河湾はおろか伊勢湾の海の交通に大きな力を持ち、勢力を伸ばしていたことがわかります。

当時の伊勢湾は、東西の海上交通の大事な場所で、日本の政治、経済に大きな影響を与える場所でした。戸田宗光が築いた田原城は海に面していたことから、船を操り海に繰り出すにはもってこいの地でした。勇壮に伊勢湾で活躍する戸田氏は他の武将たちにも一目を置かれていた存在でした。

また、戸田氏は海を支配するだけでなく、他の勢力とたくみに手を組んで領地を増やし戦国を生き抜いていきました。竹千代の事件の話も、そんな戸田氏の勢力を語り継いだものだったのでしょう。



- 【参考文献】
- 田原町教育委員会『田原町史』上巻 1971年
  - 蘭目作司「その後の戸田一族」『田原の文化』第20号 1994年



# ◆神様になった漁夫歌人 糟谷磯丸

【かすや いそまる / 1764-1848】



君井田村彦画(個人蔵)

糟谷磯丸は、江戸時代、明和元年(1764)5月3日に現在の伊良湖町で漁師の家の長男として生まれました。当時の伊良湖村は貧しく、そのうえ31歳で父を亡くし、母は長い間病気でした。親孝行の磯丸は、母の病気が治るように3年間近くの伊良湖神社に毎日お参りをし、そのかいあってやがて母の病気は良くなりました。この時から磯丸には不思議な力があつたのかもしれませんが。

磯丸が和歌に興味を持ったのは、ちょうどこの頃で、伊良湖神社にお参りする旅人たちが歌を口ずさむのを聞き、その短い言葉の中に不思議な魅力を感じたためでした。磯丸は、もともと漁師で文字を書くことができませんでしたが、努力し歌を作るようになりました。そして現在の亀山町に住んでいた大垣新田藩の役人、井本常陸に文字や和歌の教えを受け、「磯丸」という名前をもらいました。その後、吉田(現在の豊橋市)の女性の歌人、林織江が伊良湖へ旅をしたときに磯丸が世話をしたのがきっかけとなり、織江の先生であった京都の芝山大納言持豊の弟子にな



見学スポット  
伊良湖神社  
磯丸園地  
いのりの磯道 磯丸歌碑の道

り、「貞良」の名前をもらい、ますます歌がうまくなっていきました。

磯丸は旅が好きで、三河各地をはじめ、南信州、静岡、遠くは京都、伊勢、尾張、江戸なども旅をしています。また、田原の殿様に呼ばれ、田原城の月見で歌を詠んだこともありました。

磯丸は、一生のうち数万首の歌を作ったといわれています。中でも「まじない歌」は、当時の人々の暮らし向きや磯丸の人からがよく表れています。磯丸が詠んだまじない歌は、人々の願いや困りごとなどを誠心誠意、心を込めて歌にしたものです。磯丸に歌を詠んでもらい、その歌を石碑にし、掛軸にして床の間に掛けると、不思議とその願いがかなったのです。磯丸は、その行く先々で歌を詠んでほしいと頼まれ、断ることもなく、それぞれの願いを歌にしていきました。

老若男女、身分、貧富を越えて、多くの人々に愛された磯丸は、嘉永元年(1848)、生まれた日と同じ5月3日に85歳で伊良湖の地で亡くなりました。

磯丸を慕う人々は神様としてお祀りすることを願いで、それが許され「磯丸霊神」の名前をもらいました。神様となった磯丸のために伊良湖の人たちは、「磯丸霊神の祠」をつくりました。この祠は、現在、伊良湖神社境内に「糟谷磯丸旧里」の石碑とともにあります。

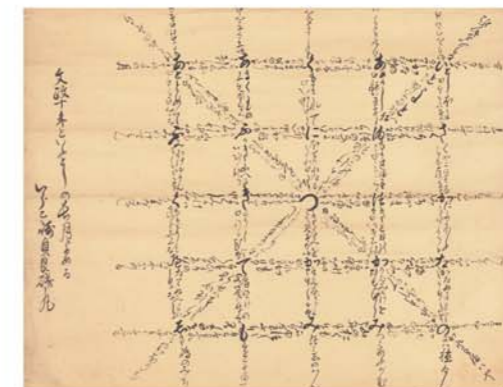
磯丸は、文字の読み書きができなかった漁師で「無筆の歌詠み」とも呼ばれていましたが、人々の願いを歌にして作り続け、やがて神様としてまつられるようにもなりました。磯丸の純粋で一生懸命奉仕した心は今も地域の方々の誇りとして尊敬されています。

### 【参考図書】

- 渥美町郷土資料館 『漁夫歌人 糟谷磯丸展』 1985年
- 渥美町文化協会 『新編磯丸全集』 1997年(復刻)
- 夏目隆文 『漁夫歌人 糟谷磯丸』 1977年(復刻)
- 安江茂 『伊良湖の歌ひじり 糟谷磯丸』 本阿弥書店 2010年



富士(個人蔵)



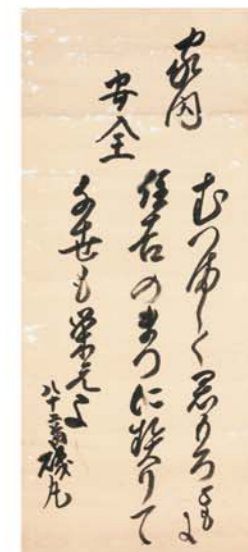
八重だすき歌



磯丸霊神証書(個人蔵)



林織江 伊良古之記(磯丸の歌が記されている)



まじない歌(家内安全)

家内安全  
むつまじく 君もろともに  
住吉のまつに契りて  
千世も栄えよ  
八十二翁磯丸



磯丸の墓(伊良湖町丸山)



霊神祠・磯丸旧里碑(伊良湖神社)



磯丸園地(伊良湖)



いのりの磯道・磯丸歌碑の道(伊良湖神社)



# 画家・洋学者で、田原藩家老 渡辺華山

【わたなべ かざん / 1793-1841】



- ★田原市博物館(華山の遺品展示)
- ★田原城三ノ丸(頌徳碑)
- ★華山神社
- ★池ノ原公園(屋敷跡・銅像・石碑)
- ★城宝寺(墓)



「渡辺華山像」椿椿山画

渡辺華山は、江戸時代、寛政5年(1793)9月16日、田原藩の江戸上屋敷(現在の東京都千代田区麹町)で田原藩士の長男として生まれました。華山は8歳頃から田原藩の若君の相手役をしています。また、絵も得意で、若い頃から家の暮らしを助けるために絵を描き、17歳頃からは、当時江戸で有名な画家だった谷文晁に絵を学んでいます。40歳で田原藩の江戸家老になると、藩におこった難しい事件を次々と解決し、田原藩を何度も救いました。また、天保7、8年(1836・37)の大飢饉では、台風などの自然災害による不作にそなえ、穀物を貯える倉庫「報民倉」建設を提案しました。そのおかげで1人も飢え死にや流亡者も出さず天保の飢饉を乗り切り、翌9年(1838)幕府は全国で唯一田原藩を表彰しました。

華山は田原藩の殿様、三宅家の歴史を調べ、田原藩の学校「成章館」に当時一流の儒学の先生、伊藤鳳山を招いたり、田原の経済を豊かにするため新しい農業作物を作らせようと農学者の大蔵永常を雇ったりするなど、田原藩の改革を進めました。

また、小関三英、高野長英らと外国のことを勉強する尚歯会というグループの中心人物となり、最新の知識を学びました。勉強すればするほど外国と交流しない日本を心配し「慎機論」という本を書きました。し

かしこれが鎖国政策を批判した罪となり捕えられました。取り調べ後、田原に送られ、池ノ原の屋敷で謹慎生活を送ることになりました。池ノ原での華山一家の暮らしは苦しく、弟子たちが華山の絵を売りくらしを助けようとした。このことは不謹慎だという声が起こり、華山は田原藩の殿様に迷惑がかかると考え、天保12年(1841)10月11日、自殺しました。

華山は文人画家の代表的な作家としても有名です。国宝「鷹見泉石像」(東京国立博物館蔵)、重要文化財「佐藤一斎像」(東京国立博物館蔵)・「市河米庵像」(京都国立博物館蔵)などの肖像画は特に高い評価を受けています。また田原藩のために幅広い知識人との交流を行い、後進の育成に努力しています。兵学・砲術に目を向けた先進性は、田原藩の幕末を支えた村上範致などの人材を育てました。田原藩の家老として幕末の動乱期に混乱なく藩政を切りまわしました。

華山は裕福でなく暮らしを助けるために学問や絵の勉強に励みました。その知識はのちに人々が幸せに暮らすために生かされていきます。また、華山は、世界を見つめ、広い視点でたくさんのことを勉強し、日本の未来を考え続けました。その姿は今も人々を感動させています。

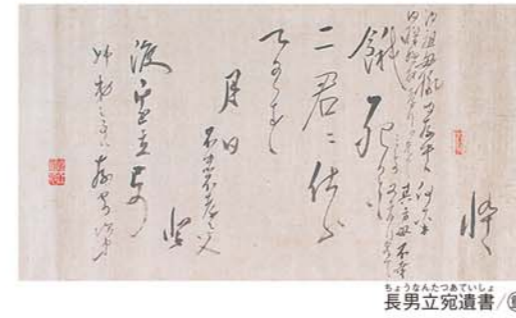


尚歯会での西洋事情の研究のようす

### 【参考図書】

- 田原町教育委員会『田原町史』中巻 1975年
- 小澤耕一編(財)華山会『少年物語渡邊華山』1968年
- 小澤耕一(財)華山会『華山渡辺登』1994年

国指定重要文化財



長男立宛遺書



一掃百態図



みんなを救った「報民倉」にかけられた額



不忠不孝 渡邊登

自殺の前に書いた墓表



池ノ原公園 華山銅像



華山頌徳碑(田原城三ノ丸)



華山神社本殿



池ノ原公園 華山幽居



華山の墓(城宝寺)



一 本文編 一 主な人物の解説 一 白井勝蔵

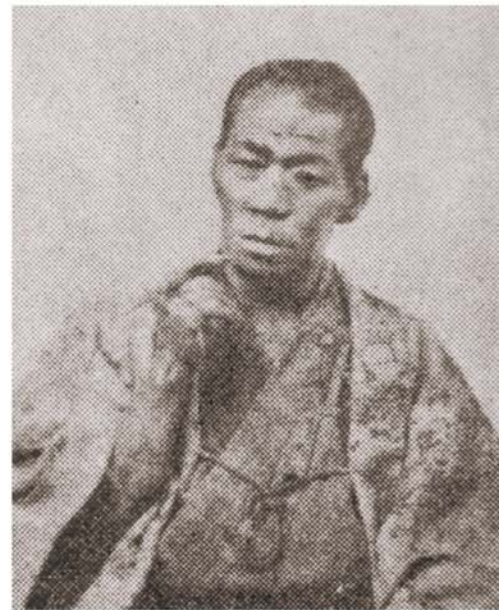
一 本文編 一 主な人物の解説 一 白井勝蔵

# ◆アメリカに渡った漂流者 白井勝蔵

【しらい かつぞう / 1831-1897】



★ 白井勝蔵の墓(当行寺)  
漂民生還謝恩灯籠  
(江比間町住吉神社) / 資料編2



江戸時代の漂流者には、土佐のジョン万次郎や伊勢の大黒屋光太夫が有名です。同じ時代、田原にも海を漂流しアメリカにまで行った人たちがいました。漂流した船の名は永久丸、江比間村(現在の江比間町)の伊藤与一の船です。乗組員は、船頭の岩吉(江比間村66歳)、船乗りの善吉(江比間村40歳)、作蔵(若見村21歳・後の白井勝蔵)、勇次郎(芦村21歳)の4人です。

嘉永4年(1851)9月に江比間を出た一行は、12月に熊野灘で激しい風と大波に見舞われ漂流しました。空腹やのどの渇き、死の恐怖や絶望的な状況の中でも最後まで助かる望みを捨てず、強い精神力で仲間を励まし続けたのが21歳の作蔵でした。漂流すること85日、グアム島付近の海上でアメリカの捕鯨船アイザック・ハウランド号に助けられました。彼らは7カ月ほど捕鯨船の水夫として働き、太平洋を北上し、北極圏にまで進み9月にハワイに入港しました。ハワイでは、彼ら4人のことが当時の新聞でも紹介されています。岩吉と善吉は年記者で妻子もいるため日本に帰されました。若い作蔵と勇次郎には見聞を深めるため、船主からそのまま捕鯨船に残

るよう命じられました。作蔵と勇次郎は、ハワイから南アメリカ大陸の南端を巡り、アメリカ東海岸のニューベッドフォードに到着しました。蒸気機関車でボストンやニューヨークなどの大都市も訪れ、その後香港に渡りました。香港からは、フランスの捕鯨船に乗り安政元年(1854)12月、伊豆の下田へ到着、ここでアメリカの船に移り幕府に引き渡されています。取り調べを受け、田原に帰ってきたのが安政2年(1855)9月、4年後のことでした。

外国の情報を熱心に集めていた田原藩はひそかに事情を聞き、その記録を「漂民間書」として残しました。

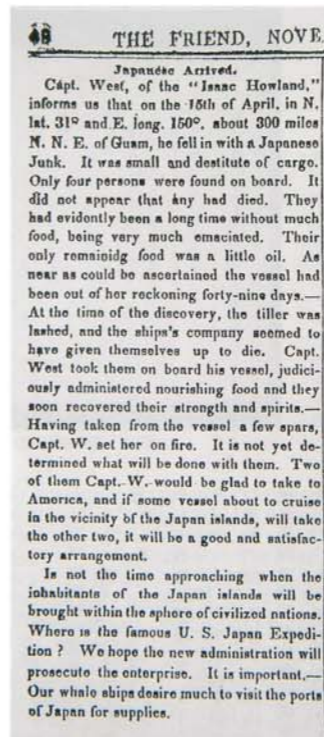
2人はやがて田原藩から武士として取り立てられました。船乗りから武士になることは例がなく、外国の知識や、船乗りの経験、そして長い漂流にも耐えた強い心を認められたためです。

作蔵は名を勝蔵と改め、海外での航海の経験を生かし西洋型帆船順応丸の指揮監督を務めました。勇次郎とともに藩の国内運輸で活躍しました。明治30年(1897)に亡くなりました。

現代では、何の不自由もなく外国との行き来ができますが、江戸時代では、外国に渡ることは想像以上に大変な出来事でした。彼らのように実際に遭難した人たちが、多くの危機を乗り越えて、希望を捨てずに生き抜く姿には感動があります。また、見知らぬ外国の文化を身につけていく柔軟さは人間の生きる力強さを見ることが出来ます。

### 【参考図書】

- 田原町教育委員会『田原町史』中巻 1975年
- 山田哲夫著『風濤の果て』1995年



漂流者の記事があるハワイのフレンド紙



共和国人物図「漂民間書」



蒸気車の図「漂民間書」



白井勝蔵の墓(当行寺)



捕鯨船図「漂民間書」



漂流者謝恩灯籠

(岩吉と善吉が奇跡的に帰ってきたことを感謝し、江比間の船主たちが住吉神社に立てたもの)



岩吉が持ち帰ったジャックナイフとガラス



# ◆ 芭蕉風の俳諧をもたらした俳人 坪井杜国

【つばい とこく / 不明 - 1690】

杜国は、江戸時代に活躍した名古屋生まれの俳人です。名古屋で手広く米商を営んでいた豪商で、広い屋敷や庭、店を持つ裕福な家でした。松尾芭蕉が愛した弟子として有名でした。

杜国は、当時の尾張藩で禁止されていた「米延商」という商売を行い、その罪で、家屋敷や財産のすべてを没収されました。そのうえ、土地から追放され、ふるさと名古屋から遠く離れた保美に住むことになりました。華やかな町で育ち、文化あふれる生活をしてきた杜国はずいぶんさびしい思いをしたに違いありません。

杜国が亡くなる3年前、芭蕉が旅の途中、保美を訪ねました。愛弟子のつらい環境をなぐさめながら、数日間の滞在中に数々の名句を詠みました。

師弟3人で詠んだ歌として、

- ◆ 松尾芭蕉 「麦はえて能隠家や畑村」
- ◆ 越智越人 「冬をさかりに椿咲也」
- ◆ 杜国 「昼の空蚤かむ犬のねかえりて」

があります。また芭蕉は杜国と越人と伊良湖に行き、有名な「鷹ひとつみつけてうれいらこ崎」と詠んでいます。元禄元年(1688)2月、伊勢に渡った杜国は、そこで芭蕉と再会し伊勢神宮にお参りしたあと、伊賀から吉野・大和と旅を続け、京都にしばらく滞在し、5月上旬に、芭蕉と別れて再び保美に帰ってきています。

元禄3年(1690)3月20日、杜国はさびしくこの世を去り、福江町の潮音寺の西に葬られました。およそ30歳代の末という若さで亡くなったといわれています。杜国の墓碑は、没後54年の延享元年(1744)に杜国をしたう人々によって建てられ、現在は潮音寺境内の師弟三吟句碑の横にあります。

杜国はその土地の人たちに芭蕉の作風を伝えました。蕉風俳諧は、杜国の家でお手伝いをしていた家田



- ★ 杜国の墓・師弟三吟句碑(潮音寺)
- ★ 杜国公園

与八郎の孫、白梅下路齋(家田路齋)の時に盛んになり、多くの弟子を育てました。その文化の流れは井本常蔭、糟谷磯丸と続きました。近代以降渥美の俳句が盛んになったのも杜国の影響によるものです。

今でも墓がある潮音寺では杜国祭が毎年開催され、杜国が住んだ保美町には「杜国屋敷址」の石柱が立つ杜国公園が整備されています。



杜国公園



杜国の墓と師弟三吟句碑

### 【参考図書】

- 粕谷魯一 『俳人杜国』(復刻版) 渥美町教育委員会 1989年
- 松野鶴太郎 『芭蕉と杜国』 1984年
- 渥美町 『渥美町史』 歴史編上巻 1991年

# ◆ 渥美半島が生んだ挿絵画家 宮川春汀

【みやがわ しゅんてい / 1873 - 1914】



御厨野文庫提供

宮川春汀は、明治6年(1873)11月11日、現在の福江町で、商人の渡辺家の第4子として生まれ、守吉と名づけられました。後には宮川の家を継ぎ、宮川の姓を名乗ることとなりました。

明治23年(1890)、17歳の時、子どもの頃より画家になることを夢見て、1人で東京に行き、挿絵界で活躍して

いた画家富岡永洗の弟子となりました。そこで春汀は、一生懸命に画を勉強し、師匠より「蓬斎洗圭」の名前をもらい、明治25年(1892)には「風俗画報」という雑誌に初めて「摘草」という挿絵が掲載されました。明治28年(1895)、その名前を春汀とすると、翌年より錦絵(色刷りの浮世絵版画)にも挑戦します。春汀の錦絵は、特に子どもの遊びや生活の様子を描いたものや美人画にすぐれ、その名は広く世の中に知られるようになりました。しかし春汀は錦絵をわずか5年間で終え、ふたたび挿絵画家としての道を進むこととなりました。

明治30年(1897)、結婚をきっかけに新居を本郷に移し、春汀は多くの文人たちと交流を深めるようになりました。春汀は詩人の太田玉茗と親友となり、玉茗の部屋に集まる友人たちに自分のふるさとである渥美半島のすばらしい景色や人々の温かさについて話をしました。その話に関心を持った柳田国男、田山花袋、玉茗などがその後伊良湖岬を訪れることとなりました。柳田国男が伊良湖岬の恋路ヶ浜で見つけた椰子の実をヒントに島崎藤村が有名な「椰子の実」の詩をつくりました。

明治32年(1899)になると、博文館から少年文学関係雑誌への挿絵の仕事が増え、明治37年からは、大人向けの小説などの挿絵も担当するようになりました。

明治38年(1905)、不幸にも最愛の長女を電車事故で亡くした春汀は、挿絵画家ではなく、日本画家としての活躍を夢見るようになります。しかし、これに失敗すると芸術上の悩みも加わり、ノイローゼのような状態になっていきます。こうして大正3年(1914)に病氣となった春汀は、その年の7月26日41歳という若さで亡くなりました。

春汀は挿絵・錦絵といった一般の人たちに愛された絵を描き続け、この時代の文学や芸術を支えた人です。また、春汀がいなかったら「椰子の実」の詩も誕生せず、ロマンあふれる渥美半島の印象も生まれなかったことでしょう。春汀がもう少し長生きして活躍していれば、今以上に歴史に名を残す人物になっていたことでしょう。



宮川春汀 childhood play

### 【参考図書】

- 渥美町郷土資料館 『宮川春汀 渥美半島の生んだ挿絵画家』 1987年
- 田原市博物館 『挿絵画家 宮川春汀展』 2010年
- 清 田 治 『研究紀要』 8号~10号 『渥美半島の生んだ挿絵画家 宮川春汀の生涯にかかわる人々(1)~(3)』 渥美町郷土資料館 2004~2006年



# ◆自らを犠牲にして多くの命を救った人 江崎邦助巡査

【えざき くにすけ じゆんさ / 1861-1886】

じう夫人【1867-1886】



★ 殉職の碑(加治町稲葉)  
墓所(蔵王堂園)/資料編2



愛知県田原警察署提供

江崎邦助巡査は、文久元年(1861)に現在の三重県鳥羽市に生まれました。明治17年(1884)、23歳のときに愛知県警察部に就職し、巡査となりました。勤勉誠実な青年警官として、将来を期待されていました。明治19年(1886)には平岩じうと結婚し、まもなく豊橋警察署田原分署(現在の田原警察署)勤務を命じられました。

その年の6月、愛知県でコレラが発生し、渥美半島から豊橋一帯でもすさまじい勢いで広がりました。6月19日、堀切村(現在の堀切町)でコレラが発生したかもしれないということで、江崎巡査は現地に向かいました。診察したところ、コレラであることがわかったため、消毒薬をまこうとしました。住民には伝染病の知識がなかったうえに、警察がコレラ患者を焼き殺すとか、毒殺するといったうわさ話が広がりました。

江崎巡査は、住民に消毒の必要を説明し、理解をもらい、そして休むことなく薬の散布や、住民の健康診断にあたったのです。

22日の朝、任務が終わった江崎巡査は田原に向かいましたが、若見町で食べたものを吐き、のどが渇

き、歩くのも苦しくなっていました。近くにいた人力車に乗せてもらいましたが、現在の加治町稲場に来ると、さらに悪くなりました。自分がコレラにかかったとわかった江崎巡査は、車を降りて道路から離れた松林の中に入り、人力車を引く人に田原分署と田原村役場への急報を頼みました。

まもなく分署員や妻のじうがかけつけました。ところが、江崎巡査は「私に近寄るな、コレラに感染する」と近づくのを拒否します。妻のじうだけは「私はたとえ死んでもお側を離れません」と夫の看病にあたりました。江崎巡査は「自分はどうやっても助かる見込みは無い。田原にはまだ伝染病院の施設はないし、コレラ菌が広がるかもしれない。住民が恐怖のあまり、治安が乱れるかもしれない」と田原に戻って治療することを拒否しました。そして、稲場の松林のなかに小屋を立て、その中で妻じうの看病を受けましたが、約1日間に苦しみぬいた末に、6月23日に江崎巡査は亡くなりました。コレラはじうにも感染しましたが、彼女も田原に戻ることを拒み江崎巡査を追うように26日に亡くなりました。ふたりは結婚生活を楽しまないうちにあの世へ旅立ちました。

江崎巡査夫妻が命を投げ出し防いだコレラは、被害が広がることもなくやがて渥美半島のコレラもおさまっていきました。

多くの住民を救った江崎巡査夫妻に感謝するため、毎年の命日には田原警察署によって法要が行われるほか、衣笠小学校では毎年学芸会で「江崎巡査物語」が上演されています。

### 【参考図書】

- 田原町「田原町史」下巻 1978年「人物編」
- 渥美町郷土資料館「郷土に尽くした人々」『研究紀要』第9号 2005年
- 江崎巡査夫妻遺跡顕彰会「郷土渥美に殉じた江崎巡査夫妻の事蹟」1975年



松浦邦治画 コレラと巡査

### ◆衣笠小学校「江崎巡査物語」



コレラの検査と消毒のため、住民を説得する江崎巡査たち。



コレラに感染した江崎巡査。みんなに説得されても田原に帰らない意思を伝える。



江崎巡査夫妻殉職の碑(加治町稲場)



江崎巡査の墓(蔵王堂園)



# ◆政治家から人を救う道へ 村松愛蔵

【むらまつ あいぞう / 1857-1939】



村松愛蔵は安政4年(1857)3月2日、田原藩家老の家に生まれ、藩校成章館で儒学、英語を学びました。16歳で上京し、東京外国語学校(現東京外国語大学)ロシア語学科に入学します。

明治時代になり、

日本が安定すると、政治の世界では、薩摩と長州出身の人たちが中心の政府ではなく、議会の開設、言論や集会の自由を求める自由民権運動が板垣退助を中心に盛んになりました。田原に帰った愛蔵もしだいに板垣の思想に関心をもち、恒心社という政治団体をつくり、西三河の内藤魯一とともに国会開設の運動を盛り上げました。明治13年(1880)自由党に入党し、板垣を田原に招き巴江神社で演説会を催しました。田原は「三河の土佐」と呼ばれ、自由民権運動が盛んな町でした。このように常に時代の先を見つめ行動する気質は、渡辺崋山以来の伝統だったのでしょう。

さらに愛蔵は国民の権利の保障、選挙権を「日本憲法草案」で起草し、新聞に発表しました。若き26歳の愛蔵が考えた斬新な内容でした。明治17年(1884)、政府の民権運動の取り締まりに反発して、直接行動に訴えるため、長野県飯田の自由党員たちと兵を挙げ反乱を起こす計画をたてました。しかし、事前に発覚し逮捕され、北海道の刑務所に送られました。これを飯田事件と呼びます。

その後、明治22年(1889)、釈放された愛蔵は、名古屋の扶桑新聞社の記者となり、明治27年(1894)、衆議院議員選挙に2度出ましたが、落選。明治31年(1898)の第5回衆院選で初当選、立憲政友会に属して政界の重鎮として活躍します。



★田原中部小学校  
(村松愛蔵生誕の地)

しかし明治42年(1909)の日糖疑獄事件で不正にお金を受け取った疑いで検挙されました。選挙運動員が知らぬ間に受け取ったお金でしたが、愛蔵は言い訳は一切せず、「事件に巻き込まれた自分の行動を恥じ、国政に参加する資格はない」と潔く政治家をやめました。

政治家をやめ、キリスト教救世軍に入り、一兵士となって「社会鍋(募金)などの社会奉仕活動を行いました。社会から取り残された不遇な女性を中心に15年余りの間に28000件以上の身上相談活動を扱い、すさんだ心を救い多くの人たちを社会に送りだしました。引退後も多くの人を救う活動を続けましたが、昭和14年(1939)4月1日、83歳で愛蔵は亡くなりました。

愛蔵は、「聖人」と呼ばれるほどまじめな政治家でした。救世軍兵士になり、政治ではできなかった多くの人々を救世軍で救いました。歩む道は違っても、愛蔵の頭の中は常に人々の幸せを願っていたのでした。波乱の人生を歩んだ愛蔵だからこその仕事でした。



村松愛蔵の生誕地(田原中部小学校)

### 【参考図書】

- 鈴木清節編『三河憲政史料』1941年
- 田原町『田原町史』下巻 1978年
- 小澤耕一『回天の志士 村松愛蔵』村松愛蔵のつどい 1987年
- 田原区『蔵王4』1997年

# ◆静坐法で日本人改革を目指した 岡田虎二郎

【おかだ とらじろう / 1872-1920】



★生家跡(田原町山口)  
★墓所(蔵王堂園)  
★静坐記念塔(田原城三ノ丸跡)



岡田虎二郎は、明治5年(1872)6月13日、田原町山口で、田原藩士である岡田宣方の2男として生まれました。家は貧しく、虎二郎も病弱でした。高等小学校卒業後は農業に従事し、渥美郡農業主事となり、稲の害虫を追い払う方法を開発し大きな成果をあげました。その後、30歳でアメリカに行き、英語・仏語・独語、哲学、宗教を広く学びました。当時の宗教や思想のありさまに失望した虎二郎は、自分が学ぶべき人は「キリスト、釈迦、孔子、ソクラテス、二宮尊徳だけである」とし、歴史、民族や国を越えて変わらないのはすべてのものを平等に愛する「大愛の心」であると悟りました。

虎二郎は帰国し、人間本来の自然体形と呼吸法をもとにした静坐法を考えました。35歳で上京し、静坐法を通じて日本人の心身開発に取り組みました。虎二郎の「静坐」は、皇族から庶民にまで受け入れられ、田中正造は虎二郎の影響を受けた一人です。教えを受ける人の数は数十万人に達しました。虎二郎は寝る間も惜しんで静坐の指導にあたり、最盛期には、1週間休みなしで78か所も指導にまわっていました。

明治時代には、日本に西洋の思想や文化、技術など、新しい文化が押し寄せてきました。人々は、新しい文化を積極的に受け入れますが、多くは輸入された思想に限界を感じ、行き詰まり、心身のバランスを崩していきました。そこで、バランスを保つための方法として、日本人が自然と身に付けていた姿勢や呼吸法をもとに考えられた静坐法が支持されたのです。腰を立てた姿勢と腹式呼吸を身につけることで、

心身のバランスを整えることができるのです。虎二郎は民族本来の自然体が大事で、日本人なら静坐、西洋人はダンスでも良い、と言っています。虎二郎が目指したものは、静坐をとおして、日本人の品性を高めようとした壮大な日本人改革でした。

虎二郎は、大正9年(1920)10月17日49歳で亡くなりました。虎二郎は、書いたものは読まれて読まれないと言っ



岡田虎二郎生家跡(成章高校北)

て、本も出さず、日記も残しませんでした。虎二郎の思想は、静坐の会や日常の中で聞いた弟子や知人たちにより、受け継がれています。静坐を通じて伝えられたその言葉は、ひとつひとつが心に突き刺さるように鋭く、しかし温かさに包まれています。

虎二郎の言葉を紹介します。「一呼吸一呼吸に自己と言う大芸術品を完成せよ。」「教育とは太陽の光のような愛である。」



岡田虎二郎の墓(蔵王堂園)



静坐記念塔(田原城三ノ丸)

### 【参考図書】

- 田原町『田原町史』下巻 1978年
- 伊奈森太郎先生顕彰会『静坐百訓補説』1962年
- 伊奈森太郎先生遺稿抄 1962年
- 小沢耕一『岡田虎二郎伝』田原静坐会 1978年
- 田原市博物館『中原悌二郎と岡田虎二郎 自然の理法・佛二郎をめぐる作家達』2007年



# ◆村民教育をつうじて農村改革を行った指導者 河合為治郎

【かわい ためじろう / 1850-1931】



野田市民館提供

河合為治郎は、嘉永3年(1850)4月12日に野田村彦田地区に、農家の長男として生まれました。家業をついで、明治8年、地租改正委員、地区の代表、明治16年(1883)に野田村戸長役場の事務員そして

村長となりました。為治郎は質素な生活を第一とし、穏やかで、無口でしたが、一度決めたことはやりぬく性格で、村人たちに信頼されていました。

野田村は渥美半島でもっとも広い農地を持ち、昔から農業を中心に栄えてきました。しかし、明治時代の中ごろに村の経済が行き詰まり、村内では賭け事や飲酒が広まって生活が乱れるばかりで、財産を失う者や、村を逃げ出す者さえ出る始末でした。為治郎は村を立て直すため、村民の精神改革をはじめました。まず、賭け事禁止の決まりを作ったほか、こつこつと仕事に励み、無駄づかいをやめ、つねに正しい行動をとることを進めるため「野田矯風会」をつくり、村民が会員となって取り組みました。この考えは、為治郎が参加していた「三遠農学社」から学んだものでした。三遠農学社は二宮尊徳(金次郎)の経済、道徳の教えをつうじて、農民にとって必要な勤勉、倹約の精神、農業技術や経営を学ぶ集まりです。為治郎は同時に新しい技術やさまざまな作物を作ることを進めましたが、古い考えを持っていた農民にはなかなか受け入れられません。そのような時は為治郎自身が手本を見せ、説得していきました。

村民の意識が変わり、村のくらしがよくなったのを機に田畑を使いやすくするため耕地整理という大事業にとりかかりました。明治39年(1906)から工事が



- ★河合為治郎銅像(野田市民館)
- ★野田神社(為治郎が祭神)

始まり、時には反対者によるじゃまや、悪口がありました。彼らもだいに為治郎の情熱に動かされていきました。為治郎は村民を工事の人夫とし、工事のお金が村内から出ないようにしました。村民が働いて得たお金は、また賭け事や飲酒、むだ使いしないように貯金をさせ、非常時のための貯えとしました。耕地整理後、作物の収穫は1.5倍にも増え、新しく山林、荒地を切り開いたため、田畑の面積も広くなりました。そのうえ水路や道路が整理され農作業も楽になりました。また、共有の山林をひとつにまとめ、松を植えそれらを村の財産にもしました。



河合為治郎銅像

となりの泉村は中断していた耕地整理を再開し、伊良湖村も野田村を見習って耕地整理を始めました。明治43年(1910)、野田村は内務大臣から村一丸となって進めた耕地整理事業の成功を称え、模範村として表彰されました。

為治郎は昭和6年(1931)9月28日、82歳で亡くなりました。為治郎は、村民の教育をつうじ村全体の意識を改革し、勤勉で倹約な気風をつくりあげ、耕地整理の事業を成功させ、村のくらしを豊かにしました。またその成功により、村民に自信と誇りを与えたことは、真の地域のリーダーであると言えます。



豊かになった田畑

### 【参考図書】

- 田原町『田原町史』下巻 1978年
- 豊橋市立商業学校『東三河産業功労者伝』1943年
- 野田区自治会『野田史』2002年

# ◆汐川を改修し田畑をよみがえらせた 仲井式次郎

【なかい しきじろう / 1869-1931】



- ★汐川改修碑
- ★仲井式次郎先生顕徳碑



神戸市民館提供

仲井式次郎は明治2年(1869)、西神戸町に生まれました。現在の神戸小学校に勤務し、退職後に地元元の区長、村会議員、渥美郡会議員、大正10年(1921)から昭和4年(1929)まで村長を務めました。

式次郎が村長を務めた頃の神戸村は、田畑も少なく、決して恵まれた村ではありませんでした。そのうえ、神戸村内を流れる汐川やその支流は、川幅が狭く曲がりくねり、いったん雨が続くと水は堤防をあふれ、周辺は水びたしとなりました。また高潮になると海水が流れ込み作物が枯れるなど、大きな被害を与えました。また台地では水が不足し、そのいっぽうで低い土地は水はけが悪く、腰までぬかるむ深田で、農道もなく耕作や収穫のための出入りも不便でした。神戸村の人たちは、働いても繰り返して起こる災害によって田畑は荒地となり、苦しみ希望を失っていきました。日々の生活は荒れるばかりでした。

式次郎はこのことに深く心を痛め、汐川沿岸耕地整理組合を作り、安心して農業ができる畑を整備するために、汐川の改修と耕地整理の事業を進める決意をしました。何回も会議を重ねましたが、「工事費をやりくりする余裕がない」、「工事の間は作物が作れない」、「新しい道路・水路によって耕作地の面積が減る心配がある」、という反対意見がありました。川の流れを変える、という想像もできない大工事が果たしてできるのか。不安ばかり先に立ちました。また、事業は複数の地区にまたがるため、それぞれの事情も複雑だったことも障害となり、組合員はなかなかうんと言いません。式次郎は説得するために20回

をこえる会議を続けましたが、賛成されません。しかし、ついに決心した式次郎は代表者の前で、「私は耕地整理はどうしてもしなければならぬと思ひ、何度でもみなさんに集まってもらいましたが事業を断念します。もう私はあの世に行きます。家族は残していただきますので家族は頼みます」と涙ながらに語りました。参加したすべての人が式次郎の姿を見て感動の涙を流しました。26回目の会議でついに全員賛成を得ることができました。

式次郎が願った汐川の改修と耕地整理は昭和2年に工事が始まり、下流の村もそれに刺激を受け耕地整理事業を進めていきました。しかし残念なことに式次郎は病に犯され、完成を待たずに昭和6年(1931)7月6日に亡くなりました。

現在では汐川はまっすぐな川となり、秋には周辺の水田に美しく黄金色に輝いた稲穂が頭をたれています。

汐川と青津川が交わる場所に、昭和32年(1957)3月、式次郎の功績を称え作られた「土地改良事業功労者 仲井式次郎先生顕徳碑」の碑があります。その姿はまるで式次郎が汐川の流れと地区の人たちの幸せを見守っているかのようです。



仲井式次郎先生顕徳碑と汐川改修碑

### 【参考図書】

- 田原町『田原町史』下巻 1978年



# ◆郷土の教育に活躍した 伊奈森太郎

【いな もりたろう / 1883-1961】



伊奈森太郎は明治16年(1883)5月1日に現在の田原市大久保町で貧しい農家の子に生まれました。森太郎が小学校に入ったころは、勉強するにはもと武士の家の子が有利でした。それでも森太郎は一生けんめいに勉強し、国のお金をもらって師範学校を卒業し、21才で田原尋常高等小学校(現在の田原中部小学校)の先生になりました。さらに明治42年(1909)には26才の若さで校長になりました。

森太郎は郷土の偉人、渡辺華山と岡田虎二郎を教育にとりいれました。華山については、貧しい中から絵と学問に励んで立派な武士となったことを取り上げ、子どもたちのお手本にしました。学芸会では華山の少年時代を取り上げた華山劇を制作しています。

森太郎自身が虎二郎の教え、また静坐法の指導で心身ともに健康になったので、子どもたちにも静坐法を教え心をきたえました。当時は、学校教育の大切さがわからず、子どもたちを小学校に通わせずに働かせていた家庭もありました。森太郎は、保護者にも学校への関心を持ってもらうために、機関紙『家庭と学校』をつうじて、学校の活動内容や、子どもたちの作文や感想文を載せました。また、働いている青少年、特に女性たちへ

家庭と学校



家庭と学校



★伊奈森太郎歌碑 (田原城三ノ丸)

の教育の大切さを感じ、休みの日や夜に講演や静坐の会も開き、学校以外の教育にも力をいれたのです。

昭和6年(1931)に学校を退職した森太郎は、愛知県庁に勤め、雑誌『愛知教育』の編集にあたり、歴史資料、考古資料、美術品の調査など進め、愛知県の文化財保護に力をつくしました。短歌も作り、のちに雑誌『うぶすな』を創刊しています。考古・歴史・民俗など広く研究し本も多く出版し、その知識を認められ南山大学にも勤務し、愛知県の郷土研究の第一人者として活躍しました。また吉胡貝塚の発掘調査や国の史跡指定にも力を注ぎました。

こうして多くの仕事をやりとげた森太郎は、昭和36年(1961)3月16日に77才でこの世を去りました。

江戸時代が終わって明治時代になり新しい学校教育の制度が定められました。それぞれの地方の暮らしや習慣に対応したやり方で教育を進めていく必要がありました。森太郎は渡辺華山を用いた郷土教育を進めただけでなく、小学校を中心に学校教育

はもちろん、家庭そして地域住民にまで地域の教育の場を広げ、地域の新しい教育を作り上げていきました。

その功績は田原市だけでなく、愛知県の教育・文化にも大きな影響を与えました。



伊奈森太郎歌碑

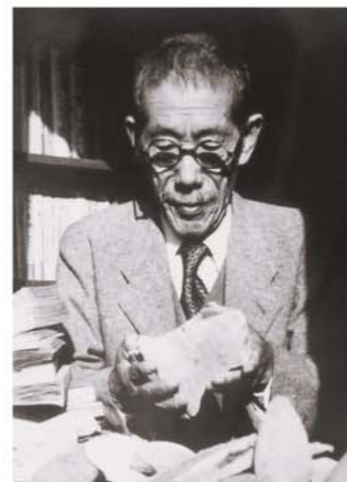
### 【参考図書】

- 田原町『田原町史』下巻 1978年
- 伊奈森太郎先生顕彰会『伊奈森太郎先生遺稿抄』1962年
- 金田温『田原に輝いた伊奈森太郎』1~3 1996~1998年
- 三浦雄二『三河人物散歩二』(財)愛知県教育文化振興会 2007年

## ◆渥美半島の文化交流の窓口

# 齋藤専吉

【さいとう せんきち / 1876-1962】



齋藤専吉は明治9年(1876)5月9日、間瀬家の次男として現在の福江町で生まれました。7歳で、母の実家の齋藤家の養子となりました。学校の代表で試験を受けるほど、勉強好きな賢い子でした。明治32年(1899)清田尋

常小学校(清田小学校)の教員となり、亀山尋常小学校校長を退職するまで教員生活を送り、福江町助役、愛知県民生委員、亀山保育園長を務めました。

専吉は、仕事のかたわら地域の文化の中心として様々な活動をしました。芭蕉の弟子、杜国の俳句を慕う「万菊社」の会員とともに、いったん中断されていた福江町潮音寺境内の三吟句碑(芭蕉・越人・杜国)を完成させました。また、自ら俳句や和歌を作り、杜国によってもたらされた俳句の文化を受け継いで盛んにしました。大正12年(1923)に『渥美郡史』翌13年には『磯丸全集』の編さん委員にもなり、地域の歴史・民俗・文化など郷土研究を進めました。

専吉はその大らかな人柄で渥美半島を訪れる文化人の受け入れ窓口となり、半島の歴史や自然を紹介し、さまざまな分野の文化人と交流しました。特に考古学・人類学者清野謙次とは仲が良く、専吉は修学旅行で京都に行くたびに、清野の家に立ち寄ったそうです。そのような専吉を清野は「仙人のような面白い人間である」と言っています。清野は専吉に教えてもらった情報を元に、川地貝塚、吉胡貝塚で縄文人骨の発掘を行い渥美半島の縄文貝塚の名を日本全国に広く知らせました。専吉なしに、考古学の宝庫、渥美半島の名も、清野謙次の名も残らなかつたでしょう。

専吉の人柄は多くの人に愛され、専吉が亀山に家を新築したとき、村人は進んで土地を提供し、庭木・庭石を運びました。自宅には旬の食料が届けられ、いつも村人たちが溢れていたそうです。専吉は、昭和37年(1962)3月13日、人々に惜しまれながら85歳で亡くなりました。

渥美半島の文学、歴史の発展は、専吉抜きには語れません。専吉の日記には、多くの文化人の名前が見られ、多くの文化人と交流したことがわかります。渥美半島の当時の人たちのくらしや、社会の動きがわかる、近代から現代の渥美半島の歴史研究の一級資料です。

### ◆専吉の日記にみる人たち

(考古学・人類学・歴史学)清野謙次・小金井良精・後藤守一、(文学者)荻原井泉水・臼田垂浪・若山牧水・土屋文明・巖谷小波、(書家・画家)宮川春汀・荒木十鈴・木翠軒



昭和26年 吉胡貝塚 左から清野謙次、専吉、1人おいて、伊奈森太郎

### 【参考図書】

- 齋藤専吉著 齋藤公男編『撫石荘日乗』上・下 書肆耕作舎 2002年
- 渥美町郷土資料館『郷土に尽くした人々』[研究紀要] 第9号 2005年 (『広報あつみ』『郷土資料館の窓』)
- 田原市『広報たはら』『たはら歴史探訪クラブ』(田原市HPで公開) 2009年



# ◆ 飴・ゼリー製造を開発した 鈴木菊次郎

【すずき きくじろう / 1868–1935】



鈴木菊次郎は、明治元年(1868)8月15日、現在の田原町で、大工の父幸左衛門の長男として生まれました。菊次郎は、真面目で温厚無口な人で、人と争うこともありませんでした。頭は良かったの

ですが、家が貧乏であったため、家業を継ぎ、大工の棟梁となり父を助けました。30歳頃、たねと結婚しました。たねは、賢く働き者で、家計を切り盛りし、日用品のお店も営み、菊次郎を助けていました。

当時、飴づくりは農家の内職で、家で作った大麦を加工して引き飴やタン切り飴として売っていました。菊次郎も、仕事の間に妻と飴菓子を作っていました。菊次郎も、仕事中に妻と飴菓子を作っていました。菊次郎も、仕事中に妻と飴菓子を作っていました。菊次郎も、仕事中に妻と飴菓子を作っていました。

明治38年(1905)には、晒飴工場を稗田(現在の田原まつり会館)に建てて製造を始めました。また明治41年(1908)には、さらし飴を原料とした加工品である固形飴菓子の製造を始め「翁飴」と名づけて全国に売り出しました。この飴は餅のように柔らかい画期的なものでした。大正3



翁飴

年(1914)に翁飴と水飴の特色を生かして『ゼリー』の発明に成功しました。ゼリーは、3、4cmくらいの長四角体の固形で、水飴の新鮮な透明度と軟らかさがありました。ゼリー作りで最も苦心したところは、ゼリーの軟らかさを長く保つことと、お互いにくっつかないようにすることでした。これを解決したのが、『オブラート』でした。菊次郎は飯炊き釜のふちに付いている炊きこぼれの汁が乾燥してから半透明の薄い皮になったのを見て、オブラートを考え出したのです。ゼリーをオブラート巻きに工夫発明したのは、菊次郎が元祖でした。ゼリーは、全国をはじめ、朝鮮・台湾・中国にまでも広まりました。

菊次郎は昭和7年(1932)に突然仕事をやめ、現在の加治町でミカン栽培をして老後を送りました。昭和10年(1935)2月6日に68歳で亡くなりました。

愛知県のゼリー製造は日本一で、菊次郎の教えを受けた会社ばかりです。菊次郎の工夫改良したゼリー菓子は、シンプルな健康的なお菓子として、今でも多くの人に愛されています。

また菊次郎は、苦勞して考えた製造機械の約30種類の特許をすべて他人へ譲りました。譲ってもらった人たちはその機械をもとに仕事を成功させています。菊次郎は商売をするより、便利な機械を発明しそれが役に立つことを望んでいました。その原点は、働かざる者の妻を助けるためのやさしい心だったのでしょ。

注) 晒飴とは、水飴を何度も伸ばして気泡を含ませ、白くした飴

## 【参考図書】

- 田原町『田原町史』下巻 1978年
- 田原区『蔵王—田原区文化誌—』2 1995年
- 東三高校日本史研究会『東三河の近代を築いた人びと』1997年
- 豊橋市立商業学校『東三河産業功勞者伝』1943年



今も愛されるゼリー

# ◆ 酪農業を導入と発展させた 大久保作吉

【おおくぼ さくきち / 1873–1937】



大久保作吉は、明治6年(1873)12月5日、馬伏町で生まれました。作吉は、泉村の村長を務め、耕地整理、宅地整理を進め、泉村に酪農業を取り入れそれを産業化させました。

大正13年、作吉が村長だったころ、酪農を取り入れ村を豊かにしようと考えました。村の役員たちと酪農の盛んな土地に行き勉強し、酪農講演会を開き村民の意識を高めました。これを機会に酪農組合を作り、作吉が組合長となりました。

組合で一定の量の生乳を常に出荷できるようになり、乳処理場、共同搾乳場をつくりました。すでに専業の業者がいたこともあり、販売には苦勞をしました。また、残った牛乳は大府の工場に送りましたが、保冷する技術もないため、生乳は傷み、輸送代にもなりません。バターも製造も始めましたがうまくいきませんでした。この頃は冷蔵庫がわりに、生産された生乳は天然の水をひき冷やし、バターは横穴を掘り貯蔵保存するなど工夫しました。

作吉は昭和2年(1927)、仲間55人と渥美牛乳販売購買利用組合を作り組合長になりました。その後も導入した牛が不良牛だったり、不景気で、経営は不安定で、ついには組合が解散にまでなりそうでした。作吉は私財をなげうってその赤字を埋め、組合が続くように全力を尽くしたといひます。

組合存続の命運をかけ、良い牛を北海道から仕入れたところ、生産が安定してきました。この頃には組合員の団結も強くなり、泉村は「乳牛の村」として知られるようになりました。昭和12年(1937)には石神町にあった事務所と牛乳処理場を馬伏町に引越



★大久保作吉銅像  
(馬伏町西瀬古)

し、組合の規模も、泉・赤羽根・野田・福江・伊良湖岬・田原・神戸・杉山の8町村に広がりました。昭和19年(1944)には全国で初めて人工受精を全面的に取り入れるまでになりました。

作吉は、病氣中にも関わらずリヤカーに乗り、組合事務所の引越しを見届け、昭和12年(1937)11月10日、64歳で亡くなりました。作吉の妻こうが「お父さんが百姓をしたのは半年だけであった」と語っています。作吉の一生はまさに地域のために尽くした一生でした。

作吉が育て、発展させた田原市の酪農は、乳牛を県内で一番多く飼育する主要な酪農地域となりました。村長自ら酪農に取り組み、産業化に成功させることは愛知県でも例がありません。作吉の村を豊かにする思いには頭が下がります。

昭和30年(1955)に、作吉をしのんで馬伏集落の入り口に銅像が建てられました。



大久保作吉銅像

## 【参考図書】

- 愛知県酪農農業協同組合連合会『愛知の酪農史』1971年
- NHK豊橋放送局編『郷土の人物語 ～東三河に生きた人々～』1975年
- 渥美町郷土資料館『郷土に尽くした人々』『研究紀要』第9号 2005年
- 渥美酪農共同組合『あつらくのあゆみ』1998年



◆豊川用水の生みの親

# 近藤寿市郎

【こんどう じゅいちろう / 1870-1960】



- ★近藤寿市郎の像(赤羽根文化広場)
- ★八柱神社(耕地整理記念碑)
- ★近藤翁生誕之地



近藤寿市郎は明治3年(1870)4月15日、高松町に生まれました。高松村役場に勤め、明治28年(1895)に村長になり、渥美郡の議会議員、愛知県の議会議員、衆議院議員、豊橋市議会議員、豊橋市長と政治家として活躍しました。

県議会の議員の時に大正10年(1921)7月から12月にかけて5ヶ月間、シンガポール・マレーシア・インドネシア方面の海外視察旅行にでかけました。そこで港の建設工事、農業水利事業を視察し、東三河発展のためのヒントを得たのでした。

ひとつは豊橋港を修築し、浜名湖から梅田川をつないで運河をつくるというもの。もうひとつは鳳来寺山脈にダムをつくって、貯めた水を渥美半島をはじめとする東三河に水を流すことです。

そして、日本に帰国してから、県の議会で「豊橋港を大きくして整える」、「赤羽根町の池尻川を漁港にする」、「豊川用水」の三つのアイデアを発表しました。しかし、当時の人々にとってその考えは大きすぎ、予想もつかないことだったため、県の議会でもまったく相手にされず笑われてしまいました。のちに「近寿の三大ホラ」といわれてしまいます。

しかし寿市郎が考えた豊橋港は、現在でも三河港の一部として自動車輸出入を主に重要な港として活躍していますし、赤羽根漁港にすることも実現しました。寿市郎が提案した「ホラ」は今では実現して、人々の暮らしを豊かなものになっています。

寿市郎の功績で最も大きなものは豊川用水の通水です。「ホラ」と言われて相手にもされなかった寿市郎は、県議会、そして衆議院議員に当選すると議会でも繰り返し豊川用水の必要性を言い続けました。渥美半島の農業の発展こそが日本の国益である、と主張しました。

そのかいあって、まず昭和25年(1950)には宇連ダムの工事が始まり、豊川用水は、昭和43年(1968)3月、完成し全面通水しました。

開通前の渥美半島は水が少なくやせた土地のため、イモ類や麦類などしか育ちません。水はため池や雨水、井戸水を使い、ひしゃくで水をまいていました。その苦労は大変なものでした。豊川用水ができたことで、渥美半島は豊かな土地に生まれ変わり、現在、田原市は全国一の農業算出額を誇るまでになりました。

寿市郎は、豊川用水の完成を見ることなく、昭和35年(1960)年4月14日に89歳で亡くなりました。

三大ホラとパカにされ、変人扱いもされた寿市郎ですが、屈せずこの土地にとって良かれと思うことを発信し続けた人でした。

【参考図書】

- 愛知用水公団・愛知県・静岡県 『豊川用水』 1968年
- 近藤寿市郎顕彰会 『豊川用水と赤羽根の農業 近藤寿市郎の生いたちと地域開発』 1994年
- 故近藤寿市郎翁顕彰委員会 『復刻版 今昔物語』 2000年

◆豊川用水通水前の農作業



牛での水かけ



桶で水かけ

◆通水後の農業



キャベツの収穫



施設園芸 電照菊



近藤寿市郎書 耕地整理記念碑 (高松町八柱神社前) (昭和29年)



近藤翁生誕之地 (高松町高松東部農村広場)



近藤寿市郎銅像(赤羽根文化広場)



# ◆渥美半島の施設園芸のパイオニア 岡田儀八

【おかだ ぎはち / 1900-1989】



岡田儀八は明治33年(1900)8月24日、小塩津町で生まれました。学校卒業後は家業の農業に従事しました。

儀八が温室による施設園芸を始めたのは昭和7年(1932)3月、32歳の時で

した。東三河における施設園芸の発祥地である豊橋市北島町で弟の儀兵が温室経営の技術を学ぶと、儀八はさっそく温室の建設に着手しました。木造で屋根、壁にガラスをはめ込んだものです。建設材料や大工の手配から、まったく手探りでの出発でした。建設された温室では、ナス・春メロン・夏メロン・キュウリ等が栽培され、大きな利益となりました。これは温室の建設費をはるかにしのぐ金額でした。当時、主な現金収入だった養蚕が不況でしたので、彼を見習って温室経営を始める人が増え、やがて伊良湖岬村全域に広がっていきました。また、「渥美郡伊良湖岬村岬温室園芸組合」が設立され、儀八は、初代組合長となりました。組合は小塩津に出荷場をつくり、トマト・キュウリ・ナス・メロン・キクなどを栽培し、名古屋・東京方面へ出荷しました。

しかし、発展しつつあった温室経営も、太平洋戦争が始まり、働き手は兵隊にとられ、作物は規制され、生産は減少しました。温室に使われたガラスも資材として差し出され、また終戦に近づく頃には温室のガラスが空襲の目標になるというので取り壊されていきました。

儀八は、戦争が終わると直ちに温室と組合の再建に取り組み、伊良湖岬村を戦争前よりももっと盛ん

な施設園芸の土地に変えていきました。重労働であった水まきを楽にするため、施設内に水道を引いたりしました。

また、農業ばかりでなく、伊良湖岬村の議員や渥美町の議員として伊良湖岬中学校建設に尽くした儀八は平成元年(1989)5月27日、89歳で亡くなりました。

儀八は、温室という施設で、渥美半島の農業の可能性を広げ、花、野菜など日本に誇る渥美半島の農業の基礎を築きました。渥美半島の農業を代表である施設園芸を産業として成功させた儀八の功績は



温室での岡田儀八



木造ガラス温室

### 【参考図書】

- 渥美町郷土資料館「郷土に尽くした人々」『研究紀要』第9号 2005年
- 渥美町「渥美町史」歴史編下巻 1991年

# ◆新しい書風をつくった 鈴木翠軒

【すずき すいけん / 1889-1976】



鈴木翠軒は、明治22年(1889)1月5日、現在の堀切町で、長尾家の5男として生まれました。本名は春視といいます。

小さいときから書道が好きで、堀切尋常高等小学校(現在の堀切小学校)を卒業後、県立第四中

学校2年生のときには、愛知県の書道展で表彰をされたほどでした。県立第一師範学校卒業後、福江尋常高等小学校(現在の福江小学校)の先生となりました。大正2年(1913)、結婚して名字が鈴木に変わります。大正5年(1916)27歳のとき、人から勧められ、文部省習字科検定試験の受検を思い立ち、猛勉強の結果、みごとに一回で合格しました。大正8年(1919)、好きな書道で身を立てようと渥美を離れて東京へ行き、書家丹羽海鶴の弟子となり、比田井天来からも書の教えを受けました。上京してからの翠軒は、日々書道の研究に励み、書の実力もさらに上がっていきました。昭和7年(1932)、文部省から『国定甲種小学書方手本』(小学校の習字の教科書)を書くことを依頼されます。翠軒は、この仕事に全精力を集中し、昭和13年(1938)に完成させました。国定教科書の執筆を終えた後の昭和15年(1940)、翠軒は、その重圧などからくる精神病(初期のうつ病状態)となりますが、翌年の秋には「焼竹煎茶」という作品を書くことにより立ち直り、後の翠軒独自の書風をつくりだすきっかけとなりました。

戦後は、日展の第1回審査員をはじめ日本書作院会長など、書道界の重要な職につき活躍します。昭和32年(1957)、「禅牀夢美人」という作品で日本藝術院賞を受賞、昭和35年(1960)には、日本藝術院会員と



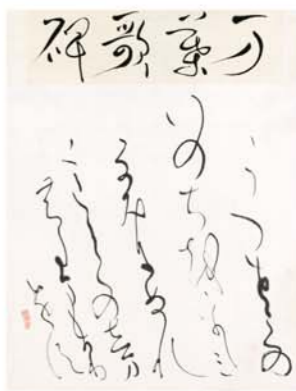
- ★伊良湖岬 万葉の歌碑
- ★「桃源」書碑

なり、書道界の指導者としての頂点に立つこととなりました。この頃より日本にしかない仮名文字の作品が増え、昭和41年(1966)完成の「万葉千首」は、生涯にわたる大傑作とされています。また、同年には、漢字と仮名文字を取り入れた代表作品「菅原傳授手習鑑」(国立劇場蔵)も完成させています。その後、昭和43年(1968)文化功労者、昭和49年(1974)には勲章(勲二等瑞宝章)を受章しますが、昭和51年(1976)9月26日、87歳で亡くなりました。

翠軒は、「習字手本は翠軒の書」とまで言われ、日本の書道に大きな影響を与えました。また、薄墨と流れる線の美しさ、のびやかな作風は「翠軒流」と呼ばれる多くの愛好者、書家が育ちました。

翠軒書作品の筆づかいには、翠軒が愛したふるさとの太平洋の荒波や恋路ヶ浜の美しく曲がった海岸線など自然風景を思い出させるものがあり、翠軒作品の根底には、やはりふるさと伊良湖岬の風景があったことがわかります。

ふるさとの地である伊良湖岬には、昭和36年(1961)に伊良湖をうたった麻績王の歌『万葉の歌碑』が、昭和63年(1988)には、翠軒生誕100年を記念して、岬に近い恋路ヶ浜に『桃源』の書碑も建てられています。



万葉の歌碑揮毫原本(個人蔵)



万葉の歌碑(伊良湖岬)

### 【参考文献】

- 田原市博物館「生誕百二十年「書聖」鈴木翠軒展」2009年



◆ 渥美半島から文学発信

# 杉浦明平

【すぎうら みるへい / 1913-2001】



杉浦明平は、大正2年(1913)6月9日、田原市折立町に生まれました。旧制豊橋中学校を経て、東京の第一高等学校に入

学後、短歌雑誌「アララギ」に入会し、代表歌人の土屋文明に師事しました。東京帝国大学国文学科に進学し、立原道造や寺田透らと同人誌『未成年』を創刊し、交流しました。大学卒業後、ルネサンス文学研究のため、イタリア語を学び、翻訳・編集の仕事をしました。第二次世界大戦中、ふるさとの折立町に戻り、戦後は共産党員となり、町議会議員を2期務めました。その間の体験を元に、地域内の利益争いを『ノリソダ騒動記』、共産党員の活動記録『基地六〇五号』、映画化もされた『台風十三号始末記』、『夜逃げ町長』など、事件取材した独特でユーモアあふれる新スタイルの記録文学が評判になり、注目を集めました。共産党を離れた後は、畑仕事をしながら、郷土の渡辺華山をはじめとした江戸時代の文化人を取り上げた小説や評論、食べ物エッセイなども執筆しました。『朝日ジャーナル』に連載した『小説渡辺華山』で昭和46年(1971)に毎日出版文化賞、同52年(1977)に中日文化賞、平成7年(1995)に『ミケランジェロの手紙』の翻訳で日本翻訳出版文化賞の特別功労賞を受賞しました。

渥美半島は、太平洋・伊勢湾・三河湾という海に囲まれた歴史や自然にあふれた土地のため、万葉の昔から多くの歌人や俳人が訪れた文学半島です。明平はこの歴史を受け継ぎ、作家活動を行うだけでなく、戦後から平成にかけて多くの文学者・文化人を渥美半島に招き、広く渥美半島の歴史や風土を案内

しました。また、文学者明平の存在は、文学半島である渥美半島の歴史を新たに作り上げました。

作家としては、記録文学(ルポルタージュ)という新しいスタイルを作り上げただけでなく、文学評論、短歌論、作家論、歴史小説、ルネサンス文学の研究、童話の翻訳など日本の文学史に残る作品を数多く書きました。

日本の文学、渥美半島の文化祭展に大きな業績を残した明平は、平成13年(2001)3月に亡くなりました。

平成元年には、蔵書の一部を渥美町図書館へ寄贈しました。



渥美の四季



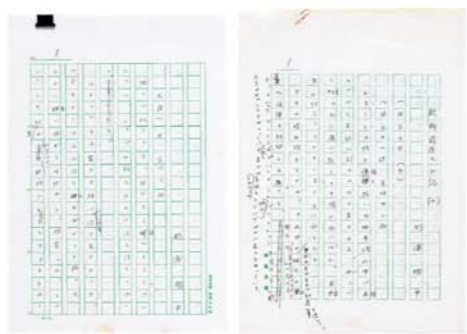
華山と長英



泥芝居



渥美だより



「敗戦前後の日記」原稿

【参考図書】

- 平野栄久 『杉浦明平論 定点を生きる』 オリジン出版センター 1989年
- 玉井五一・はらてつし編 『明平さんのいる風景』 杉浦明平生前追想集 風媒社 1999年
- 田原市博物館編 『杉浦明平の世界』 2010年

◆ 人物一覧

文化(学問・芸術・教育・思想)

校区	名前	略歴(生誕地は現住所)	生没年	ゆかりの地	参考図書(図書番号)
堀切	潔堂義俊	堀切町常光寺を開いた。奥郡中心に曹洞宗を広める。和地町の寺沢で入道し即身仏となる。	1424~1489	石碑(和地町)	21・24・28
中部	鷹見爽鳩	江戸生まれ。田原藩士の子。萩生徂徠に学び、詩文に優れ、経済に明るく藩政に寄与した。著書に『爽鳩詩稿』『詩筌』『或問診』『御家中由緒書』がある。	1690~1735		13・3
福江	杉江道雲	中山村の領主清水権之助の儒医。常翁通称道雲。和漢の学問に長じた。元禄6年に三河地方最初の地誌『伊良湖名所記』を著し、三河地方の郷土史の先駆けとなる。	?~1743		5・24
福江	白梅下路齋	保美町生まれ。家田与八。祖父は杜国の雇われ人だったという。渥美の俳諧の振興に貢献した。	1723~1789	墓所(保美町)	35・21・18
中部	三宅了閑	田原藩三宅氏4代。康高。和歌・俳句・茶道・画を能くする。南坊流10世の宗匠となり諸大名茶道の師匠となる。	1710~1791		13・3
中部	平山文鏡	田原藩家老。南坊流茶道を三宅了閑に学び宗匠となる。画を加藤文龍に学び渡辺華山の最初の師となった。	1732~1801		13・3
中部	平山梅人	田原藩士。俳諧を芭蕉の弟子杉山杉風に学び二世探茶庵を襲名した。雁々斎の弟にして傍ら絵画の技あり。龍泉寺に芭蕉の句碑を建立する。	1744~1801	芭蕉句碑(田原町龍泉寺)	13・3・34
中部	鷹見星皐	江戸生まれ。田原藩家老。有明館という塾を開き、佐藤一斎、竹村梅斎、渡辺華山を教える。	1751~1811		13・3・2
中部	萱生玄順	田原町生まれ。儒学を亀田鶴斎・佐藤一斎に、医学を鈴木愚伯に学ぶ。田原藩儒医。藩校成章館を開講し、藩士の育成に寄与した。『田原城主考』全5巻を作った。	1772~1837	墓所(田原町当行寺)	13・3
童浦	鈴木園(その女)	浦町生まれ。鈴木春山の母であり、真宗の篤信者として有名。	1774~1853	墓所(田原町龍泉寺)	『田原のお園さん』龍泉寺書庫1988年13・3・9
亀山	井本常蔭	亀山町生まれ。大垣新田藩の部奉行の子。伊勢松阪の本居宣長に国学を学び、多くの国学者や歌人と交わる。糟谷磯丸に和歌を教える。	1776~1813	墓所(亀山町桂島庵跡)	『井本常蔭国学者』渥美町教育委員会18・24・26・27
童浦	豊岡検校	吉胡町生まれ。岡田家の子。盲人であったため、江戸に出て鍼灸・按摩の学術を修め、検校の官職に就き将軍家の治療を行う。	1781~1863		13・10
伊良湖	草嘗智典	日出町生まれ。古田町真如寺で出家し、江戸に渡り修行。郷土出身の大僧正。増上寺65世の貫主として大僧正の座を務めた。	寛政~1863	供養塔(日出町佛命寺)	35・28・24・21
中部	広中養安	幡豆郡萩原村長糟谷鐘右衛門の子で、田原藩の御用商人中家の中家の養子となった。茶事・歌道を好んだ風流人であった。冷泉為則に和歌を学んだ。昭和44年に『広中養安集』と題して刊行された。	1789~1864	墓所(伝法寺)	田原市博物館新収蔵品展(H21.3.27~5.10)目録
童浦・中部	鈴木春山	浦町生まれ。長崎に留学し、西洋医学を学び、田原藩に儒者として、医師として活躍した。日本で初めて西洋医学の翻訳に着手した。著書に『兵学小識』『三兵法』、『海上攻守略説』がある。	1801~1846	墓所(田原町龍泉寺)	『田原のお園さん』龍泉寺書庫1988年3・13・9・23・32
福江・中部	伊藤鳳山	山形県酒田市生まれ。町医の子。朝川善庵で儒学を学ぶ。儒者として華山のすすめで田原藩儒、成章館教授となり、田原市の近代を進めた人物たちの指導をした。	1806~1870	墓所(蔵王霊園)	3・13・2
中部	三宅友信	江戸生まれ。田原藩主隠居。華山及び当時の海外事情研究者の支援を行い蘭学研究に貢献した。華山に学び、高野長英・鈴木春山たちと蘭書を取り寄せ翻訳・研究。『鈴林必携』訳。	1806~1886		3・13・23・2
中部	松岡次郎	岡崎生まれ。田原藩松岡家の養子となる。田原藩家老。渡辺華山、佐藤一斎らに学び、成章館文学講義、若君の文学相手などをした。『全案堂記伝』『ナポレオン伝』『臨陣遠近指掌』の著書がある。	1814?~1858		3・13
中部	萱生郁蔵	名古屋の町医の子。萱生家へ養子。火薬製造、戦時常備薬などの研究。田原藩洋式帆船砲丸の建造に尽力。『統著草』を刊行。田原藩儒医。	1819~1868	墓所(田原町当行寺)	3・13
赤羽根	葛野家	寛政年間以降、赤羽根町で6代にわたり医業を行った家系。代々字仲と襲名。田原藩の医師も務める。また、寺子屋を経営し、教育の振興にも尽力する。	江戸~戦前		11
若戸	森 暁助	越戸町生まれ。農業孫兵衛の2男として生まれる。吉田(豊橋)の鍛冶の弟子となる。小さな頃から剣道を志し、17歳で江戸に出て神道無念流を習い、皆伝となり吉田に戻る。吉田藩の剣道師範として活躍。大坂講武所世話役となり将軍家茂の前で披露した。	1825~1898	寿碑(豊橋市東田桜岡公園)	11・16
東部	阿保迪斎	三重県津市生まれ。僧となり、新藤拙堂に儒学を学ぶ。成章館文学一等助教となり。相川町で私塾を開設した教育者。	1830~1890	報恩碑(相川町)	14
中部	渡辺小華	江戸生まれ。渡辺華山の次男。南画家。椿橋山に人として画家として育てられた。田原藩家老として、幕末の混乱期を切り盛りし活躍。その後豊橋に移り、東三河を中心に多くの門人を育成した。	1835~1887	墓所(城宝寺)	『渡辺小華展』田原市博物館 2007年3・14・22・24・16
中部	鈴木孝之助	田原町生まれ。田原藩士の子。東京大学医学部を卒業し、海軍軍医中尉。結核療養所を創業し結核撲滅に情熱を注ぐ。	1854~1945		3・14
中部	中村恭平	田原藩医の二男として生まれる。最年少で藩の推せて大学南校に入る。東京大学理学部物理学科卒業。東京物理学学校設立者の一人で三代目校長。	1855~1934		3・14
中部	鈴木清節	豊橋市生まれ。本名金太。吉田藩士の子。田原町の鈴木家の養子となる。田原町長・新聞記者。『華山全集』『三河憲政史料』の著作がある。	1869~1952	墓所(蔵王霊園)	14
中部	白井こう	田原町生まれ。藩士の山本家の子。夫を早くに失い苦学の末、岡崎家政高等女学校を創立し、女性の教育を進めた先駆者。山本右太郎の妹。	1869~1954	墓所(蔵王霊園)	『白井こう先生伝』1976年 白井こう先生伝刊行会・14
中部	岡田藤十郎	田原町生まれ。自由主義教育の先駆者。岡田式基本計算練習盤を発明。東京府立第八中学校校長。岡田虎二郎の兄。	1870~1943	墓所(蔵王霊園)	『岡田藤十郎伝』1984年 東京府立第八中学校一回生会・14・23
赤羽根	鈴木里吉	赤羽根町生まれ。愛知県尋常師範学校を卒業し、赤羽根の明治期の教育に大きな影響を与えた。退職後も村政に尽力する。	1872~1960	頌徳碑(赤羽根小学校)	11
赤羽根	小笠原華文	赤羽根町生まれ。南画家。本名庸雄。はじめ南画家岡本木国に師事。上京し荒木十郎に師事。帝国絵画協会・中央南宗画会・読画会等幹事を務める。将来を期待されるが49歳で急逝。	1876~1924		11・22
泉	川合華光	江比間町生まれ。本名茂助。旅館業を営みながら俳句を詠み白田亜浪に師事した。泉小学校の校歌は華光の依頼で亜浪が作詞したもの。華光の旅館には多くの文人が訪れる泉は俳句が盛んな地域となった。	1893~1968	歌碑(江比間句碑公園)	『白田亜浪と江比間につらなる俳人』28・35・27



人物一覽

文化(学問・芸術・教育・思想)

Table with 6 columns: 校区, 名前, 略歴(生誕地は現住所), 生没年, ゆかりの地, 参考図書(図書番号). Includes entries for 龜山 松下石人, 大草 中田恭一, 福江 天野四郎, 泉 鈴木鶴千, 伊良湖 粕谷魯一, 清田 八木喜平, 福江 鈴木圭介.

政治(領主・地方自治・ジャーナリズム)

Table with 6 columns: 校区, 名前, 略歴(生誕地は現住所), 生没年, ゆかりの地, 参考図書(図書番号). Includes entries for 大草 一色七郎, 福江 烏丸資任, 伊良湖 精谷六郎佐衛門, 中山 河合伊左衛門 久右衛門, 野田 河合清右衛門, 中部 真木定前, 中部 村上範致(定平), 中部 川澄徳次, 中部 八木重治, 中部 山本右太郎, 赤羽根 鈴木五六, 伊良湖 嶋津十文字, 泉 小笠原京平, 神戸 伊藤武雄.

経済(産業・技術・開発)

Table with 6 columns: 校区, 名前, 略歴(生誕地は現住所), 生没年, ゆかりの地, 参考図書(図書番号). Includes entries for 中部 文殊四郎正真, 野田 藤江弥七郎, 赤羽根 前田又平, 福江 上村空左衛門, 南部 大場民平, 赤羽根 小林伊吉, 野田 山田寿二, 福江 黒田佐十 斎藤新衛門.

ゆかりの地を訪ねる



1 井本常陰の墓 (龜山町桂岳庵跡) 2 芭蕉の句碑 3 章譽智典供養塔 (日出町常命寺) 4 潔堂義俊入定地の碑 (和地町北山)



5-1 黒田左十翁碑 (保美町の毘沙門天) 5-2 開墾発起者の碑 (保美町の毘沙門天) 6-1 三谷新三郎の墓 (小中山町医王寺) 6-2 三谷新三郎の碑 (小中山町医王寺) 7 烏丸資任の墓 (保美町靈山寺)



8 白梅下路蕎麦の墓 (保美町靈山寺) 9-1 伊左衛門・久右衛門碑 (中山町西湖院) 9-2 伊左衛門・久右衛門墓 (中山町西湖院)



10 間宮家の墓所 (古田町栖了院) 徳川家にも仕え間宮水軍として活躍した間宮家の墓所





資料編2 ゆかりの地を訪ねる

資料編2 ゆかりの地を訪ねる

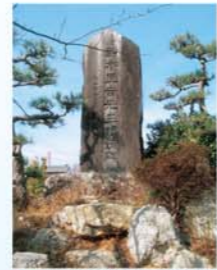
# ゆかりの地を訪ねる



11-1 江比間句碑公園



11-2 鈴木鵬干句碑 (江比間句碑公園内)



12 鈴木里吉頌徳碑 (赤羽根小学校)



20-1 伊藤鳳山の墓



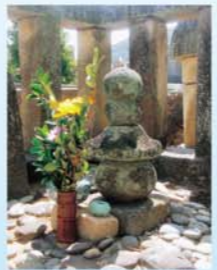
13 河合清右衛門の墓 (野田町柏坪)



14 河合清右衛門の碑 (野田町札木)



15 大場民平の碑 (南部小学校)



16 一色七郎の墓 (大久保町長興寺)



17 一色七郎の屋敷跡 (大草町蔵屋敷)



18 伊藤武雄の碑 (西神戸町西光寺)



19 阿保迪斎報恩碑 (相川町高木)



20-2 白井こう墓



20-3 岡田藤十郎墓



20-4 川澄徳次の墓



20-5 山本右太郎の墓



20-6 村上載致の墓



21 村上載致頌徳碑 (田原城三ノ丸)



22 山本右太郎銅像 (成章高校前)



23-1 萱生郁蔵の墓(右)

23-2 萱生玄順の墓(左) (田原町当行寺)



24 一色七郎の墓 (田原町八幡社)



25 真木定前の墓 (田原町堂敷寺)



25-2 田原藩主三宅家の墓所 (田原町堂敷寺)



26 渡辺小華の墓 (城宝寺)



27-1 鈴木園の墓



27-2 鈴木春山の墓 (田原町龍泉寺)



27-3 芭蕉句碑 (平山梅人発起人)

28 八木重治の墓・記念碑 (田原町龍門寺)



◆参考図書

赤字で記されるものは、田原市の人物が載っているとくに大事な図書です。  
番号は、本文編・資料編に記される図書番号と一致します。

番号	図書名	発行者	発行年
1	〔渥美郡史〕	愛知県渥美郡役所	1923年
2	〔新編 愛知県偉人伝〕	愛知県教育会	1934年
3	〔田原史〕(1974復刻版)	田原区	1935年
4	〔半島渥美〕	愛知県渥美郡国民教育報国会	1941年
5	〔郷土人物年表〕	左藤又八著 閑翠書屋	1941年
6	〔東三河産業功労者伝〕	豊橋市立商業学校	1943年
7	〔渥美の地理〕	渥美郡新教育研究会	1949年
8	〔泉村々史〕	泉村々史編集会	1956年
9	〔浦区郷土史〕	浦区事務所	1957年
10	〔田原町吉胡郷土史〕	田原町吉胡郷土史編集委員会	1962年
11	〔赤羽根町史〕	赤羽根町	1968年
12	〔田原町史〕 上巻	田原町教育委員会	1971年
13	〔田原町史〕 中巻「人物編」ほか	田原町教育委員会	1975年
14	〔田原町史〕 下巻「人物編」ほか	田原町・田原町教育委員会	1978年
15	〔郷土の画人展〕	渥美町郷土資料館	1986年
16	〔郷土豊橋を築いた先覚者たち〕	豊橋市教育委員会	1986年
17	〔三河の歴史と人物で綴る歴史指導資料集〕	三河教育研究会社会部会	1989年
18	〔渥美町史〕 歴史編 上巻	渥美町	1991年
19	〔渥美町史〕 歴史編 下巻	渥美町	1991年
20	〔白田亜浪と江比間につらなる俳人〕	渥美町郷土資料館	1991年
21	〔渥美町のむかし探訪〕	山内藤雄著 愛知県渥美町農業協同組合	1992年
22	〔定本東三河の美術〕	郷土出版社	1992年
23	〔蔵王—田原区文化誌—〕1~5	田原区	1994~1998年
24	〔伊良湖崎の文人墨客〕	渥美町郷土資料館	1994年
25	〔東三河の近代を築いた人びと〕	東三高校日本史研究会	1997年
26	〔三河人物散歩〕	愛知県教育文化振興会	1997年
27	〔渥美半島と文学〕	渥美半島郷土研究会	1997年
28	〔広報あつみ〕「郷土資料館の窓」 (渥美町郷土資料館「郷土に尽くした人々」[研究紀要] 第9号 2005に再録)	渥美町	1999~2001年
29	〔渥美町の民俗探訪〕	清田治著 愛知県渥美町農業協同組合	2001年
30	〔野田史〕	野田区自治会	2002年
31	〔渥美町史〕 現代編	渥美町	2005年
32	〔三河人物散歩二〕	愛知県教育文化振興会	2007年
33	〔渥美半島を描く 田原市博物館新収蔵品展〕	田原市博物館	2009年
34	〔田原の文化〕1~37号	田原町・田原市教育委員会	1965年~
35	〔研究紀要〕1~10号	渥美町郷土資料館	1996~2006年

その他

〔大草史〕	大草史編集委員会	1974年
〔小塩津史〕	小塩津自治会	1991年
〔角川日本姓氏歴史人物大辞典23 愛知県〕	角川書店	1991年
〔伊良湖誌 伊良湖集落移転100周年記念〕	伊良湖自治会	2006年

田原の文化財ガイドⅡ  
ふるさとの偉人を訪ねる — 田原を築いた人びと

〔編集・発行〕

田原市教育委員会 愛知県田原市田原町南番場30番地1 ☎0531-23-3635

初版 平成23年3月発行 平成27年1月一部改訂

令和5年3月発行 デジタル版